



「感動」の意味

(株)平成建設 社長 秋元久雄あきもと ひさお

高度経済成長長期以降、建設会社では、大工や職人は社員として育てるのではなく、外部から雇うのが当たり前です。バブル崩壊後は、若手の人材獲得、育成がなかなかできず、高齢化が一段と進み人材不足は深刻です。そうした状況を予想して私は、大工や職人を社員として「内製化」できれば、十年後、二十年後、世の中に大工や職人がいなくなったときには一人勝ちできると考えました。そして平成元年、四十歳で当社を立ち上げました。とはいっても、現実には、社員は自分一人。最初は地元の建設現場でのスカウトや、工業高校から紹介を受けながら大工や職人を採用していました。ところがあるとき、地元出身の大卒が入社したのです。

このとき私は、静岡県で一人いるということは、全国では五十人は希望者がいるだろう、県で二人いれば百人いるはずだ、と考えました。潜在的な大工や職人の希望者が、全国であれば十分にいと仮定したのです。そして「大工はバカじゃできない」「設計や現場監督ばかりいても、いったい実際につくっているのは誰なのか?」「本当の大工は設計も現場監督も営業も弟子の育成もできるすごい存在なんだ」というように、従来の大工や職人のイメージを覆しつつ、その存在意義を学生たちに訴えたのです。

すると予想どおり、設計になれば現場監督にでもなるしかないというような二者択一を迫られていた建築学科の学生にとって、大工や職人が重要な職業の一つとして選択肢にあがるようになってきたのです。

今や、東大、京大はもとより有名国立、有名私大の卒業生が、大工や職人として何人も当社で活躍してくれています。しかもほとんどが県外出身者! これからはわが国の何十倍もいるアメリカの富裕層に日本建築を提供する先兵として活躍してもらおう予定です。

宝くじに当たることを感動とはよびません。魚釣りと同じで、感動とは自分で仮説を立て、しくみを考えて実行した結果、思ったとおりに実現したときに味わうことができるものです。そして教育者・森信三氏の言葉「人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早過ぎず、遅すぎないときに」(寺田清一編「森信三先生一日一語より」)のとおり、思いは最高のタイミングで必ず実現するのです。